



2011 - 2012

終夜営業 | **Open 24 hours** | 発送受付

中  
田  
滿  
帆

だれにも献じられず、もちろん捧げられない。

## 注意書

(1) 本品は食用ではございません。万が一食用になられた場合はすみやかに吐きだされるか、医師による指示をうけてください。

(2) 本品は火気に接触致しますと、発火のおそれがあります。その場合は使用者による鎮火はたいへん危険ですので、もよりの消防へのご連絡をお願い致します。

(3) 本品はたいへん危険です。お子さまのお手の届かない場所に保管するか、または施錠をおすすめします。

(4) 本品はひとに害を及ぼす可能性がございます。使用に際して換気、または野外での開封をお願いいたします。

(5) 本品の使用後は、すみやかに廃棄し、各地域の分別方法にしたがって処分して下さいよう、かたくお願い致します。

(6) また本品はどなたにも献じられておりません。捧ぐこともできかねます。あらかじめ、ご留意をいただき、とくに意識のうえ御使用お願い致します。

終夜營業

—

Open 24 hours

—

發送受付

## table of contents

当ホテルの門限は午後十一時までとなっております、	12
ただいま改装作業中につき、迂回を	14
女性は地球にいちばんちかい存在です	17
この番号は受付順番ではありません。	20
一泊八百円より テレビ付	23
市立更生センター 宿泊午後五時から翌朝八時迄	26
お手を触れないでください。万が一、破損された場合には	28
行政の指導により、灰皿を撤去しましたので、	31
関係者以外の立ち入りを禁ず	34
世界人類が幸せでありますように	36
Don't block	38
ごみはみずからおもちかえりを	41
take free	47

- 蔵書検索はこちらの端末から—— **49**
- USA American dream heir club—— **53**
- 与えないでください—— **56**
- ここは小屋掛け禁止です—— **58**
- キャバレー・ロンドンへの入口はこちらではありません。当店は飲食店となっております。—— **63**
- しばらくお待ちください—— **67**
- 遺失物預かり所⇒—— **69**
- 鍵の複製・四十分—— **71**
- 外国人登録・臨時運行—— **73**
- 閉じてから擦ってください—— **75**
- お立ちにならないでください—— **77**
- 乾燥したところにおいてください—— **80**
- Naked blue—— **82**
- フラメンコ・ギター教えます（個人教授）—— **83**
- not more not more more pipipi—— **85**

以上は、承っております——即興詩——**88**

未定稿・未収録詩篇

ごみはみずからおもちかえりをおねがいます——**91**

イエス・キリストはかならず蘇る——**97**

待合室での以下の行為は禁じられております——**99**

落石注意——**101**

一時預かり 1時間¥300——**104**

こちらはおつとめ品です——**107**

責任は負いかねます——**114**

さまよい《初稿》——**116**

入力情報に誤りがあります——付言するとすれば、——**125**

来歴——**126**

装丁——著者自装

当ホテルの門限は午後十一時までとなっております、

がらすのうちつかわにあるマネキンたち

かの女らに情慾をおぼえるときがある

それというのも

そこに悪意もいちのわるさもなく

あふれものを癩のようにすることもなければ

いついつまでも責めたてるのも

中身のないうちで瑕

をつくりだすこともない

ましてどやや、橋のたもとにいるけものへと

ふきながしていくこともないだろうから

たっふりと眼をやっては過ぎ去る

だがいまはそんなにたやすい光景ですらも

とうに売り買いへだされてしまい

あてを知らないもの

失いのうちにいるもの

隠しをからにしたものなんかがおもうのはかれ自身のみ

つまるところは手折れた茎にみずからのすべてがあるということ

ほかを赦されないときには鉄柵を握る

それはふるえとともにあつてたなぞを焼く

蓑をくれないか、ねえ？

ときおりなにかが声をかける

すまない、もってない

喫んでそうなつらなの？

そうやって語らいが求められても

ゆずりわたすわけには決していかない

ほんのすこしのあいだをあける

それが話しはじめるとき

マネキンがひとのように倒れた

ふたりしてみたら

店員の女が遅まきにあられ

ひとでないかのようにかの女を起していなくなった

もうじき閉店だ

## ただいま改装作業中につき、迂回を

ふるい灰のような、

埃のようなものが光りのあいまに浮かぶ

それらをからだにこりつけながら横たわり

そうして立ちながらもいくばくかの聖さと

なにがしかの技量を得て

それらとともに終わりを待ったあと

だれかといっしょに救貧院を放たれて手配師に連れられた

どこか中部でみな食事代をもらうとばらばらになってトンコ

だれもないところを遁れ

建物のまえを通りかかる

そんなところであつて

配達夫だったことがあつた

あまり早くはない朝どき

老局員が機械から零れたものを手でよりわけ  
それを横目にしながら発車口へでる  
たやすい区画を任されていたというのに遅くまでくばり終えなかった  
かくれてだれかの吸い殻を手にするあいま  
だれかがわたしのロッカーに水を注げば就業だった

ありふれたこと、

通りで眠っているうちにもちものを失う

残ったやつでペンと履歴書を手にするも

どのようなものにも受け入れられない

すべてに縁のないことをいまさらながら覚って

ただなにもかもに遠ざかる

すつかりあてもなくなつては家へ帰る

職も探さずにねむりにつき

夜ふけては父とやりあい

いつも負かされた

しばらくするとふたたび文なしのままでていく

手に入れられるのはかけ

男のようなものや女のようなものや子供のようものがどこへでも歩む

それらはかげを通って

かげのうちで失せ

だれかがしやべるのが聞える

おれだってだれかに好かれない

生きてるうち？

死んだあと？

かげがまだ火照ってる

## 女性は地球にいちばんちかい存在です

土鳩をてなづけた髯の老夫や、

幻しと話すやつがいて、

それで雨でかれらは本日、みな不在

自販機酒場からじつと滴りを見てた

ちいさな室の販売機のならばから

ビール、ウイスキーサワー、湯割りの焼酎、にがり酒、薬味酒

売りものを眺めやつてはもってるふんをかぞえる

これがどやがいの手品、その流儀さ

あるいはおれだけかもしれない

さむさにかたくなつたひとびとが立ち話しをつふやき、

こつちを、おれを、よそものを伺つてた

入口にはくず入れがみえる

おおきな水色のかご

そこに老夫が入ってた

あおむけで雨を浴みながら笑顔

きもちのいい、いかにも幸福なおもぎしに哄笑を叩きだしたくなる  
たまらねえ！

少しして女が入ってきた

ずいふんと年増

さむいというからジャケットを貸してきせてやる

酒だけはかたくなだった

いっぽんも呑ませない

おれはよき息子になってた

「おかあさんを連れて帰ってやれよ」

あんまりせかさされて室へいった

やろうとしても勃たない

はじめてふれた女陰、

からめた首筋も、

汗臭くて、べったりとしたなにかできてくる

あなた、おかあさんが好きなの？

きらいだね

好きそうに見えるのに

見えるだけでよかった

どうやっても入らなかったからか、かの女は帰っていった

シャツとズボンを貸してそのまんま

おれは降るなかをでてスプラッシュを買いにでる

かの女のうしろ姿がみえる

ふるびた色町を過ぐ

群れは女をさぐりまわっては声をあげ、

電気ヒーターの後光がかの女たちを輝かす

犬はどこにもいない

この番號は受付順序ではありません。

あるとき

その道には

犬どももあふれものもなく

ほかのいかなる特別な由しもないのに

道がおれをみみずばれにした

踏みつけられたのだ

太った聖者に

おれは笑う

こんなことだけがおれの生活の脚韻で、

進むための

袋小路

いまは雨のうちがわにいる

さむさをつくつて降りのうち

けがれまわった道を歩くやわらかい男根  
それがだれだか答えてごらんよ

おれは呑む

それはどこにでも

いつでもあつて

とめることはできない

雨が降つてるといふ誤解のうち

いつでもおれは詩人になってしまふから

みずからをずたぼろにさせたのだ

くさった女か子供のよなものだ

貨物車輛のしたにくる

そこにはだれもいない

呑みつづけてられる

死ぬための不凍液もある

わずらいとつかれのあいまを

いつたりきたりするうち

雨はやんだ

ほんとうは降っていなかったというのに

そうしておれはどこへいく？

きみ、知ってるか？

## 一泊八百圓より テレビ付

天使そっくりな男たちが落ちてくる

ビルヂングのうえからなんのおもづらもなしに

かれらは並木にひっかかり

あるものは電線にひっかかり

路のうえに落ち

娼婦に唾をかけられ

咽のおくを胃酸にやられ

ごみだめにその身をささげる

かれらはまったく天使のようだが

これは比喩ではない

ただそれだけのことさ

それらを見ながら自販機酒場で呑んでいたら

おれのことを警察官だとわめきたてるやつがいる

ふざけるな

あんなたまねぎみたいに

中身の見えないやつといっしょにするな

制服を着た、制服どもといっしょくたにしやがって

とんだくそつたれだよ

おまえは青ざめた顔におびえの眼をはつつけて

ほかの群れのなかにまぎれようとする

まったくむだなことだ

じつと黙したまんまおれはおまえを見てた

そのとき赤みがかった虫がおれの手のひらを刺す

とっさにそいつをいっぼうの手でつぶした

手のひらに羽だけが残った

それを払いのけて天板を見る

暮れきつてもうそろそろ

避難所はいっぱいになるだろう

だからといって天使になんてなりたくもない

なるとすれば神だ

ふるい夜のことだった。かれが寝返りをうったために一羽の小鳥が死んだ。それは縁日に買った、雛だ。檻からでてかれとたわむれようとしたとき、かれの重みによって殺められてしまった。朝明、かれは気づき、まず泣けるか、涙を流せるかどうかを験した。どちらもよくできたもので、からになった檻が鳥影とともに飛んでいくような気がした。かれは葬りもせず、朝餉を済ますと、階下へいき、運送の仕事にハンドルを切った。それはまだ若いころのせつなである。

いまのかれは貧区の貸し室に棲んでいる。宿のないものを誘っては酒の肴にするのだ。わたしは一緒にむかしの映画を観た。喜劇役者の丁稚姿を眺めながら老人の酒に吞まれていく。かれは酒と葎を主食にして生きている。穢らわしいネオンのまえや、公園まえの自販機酒場でかれとたびたび会った。老人の親類は兄のみ。それともすでに二十年会っていない。わたしは奢ってもらった罐珈琲を握って、その音を聴く。まるで芝居じみたながれのうちで、わたしたちは植込みに坐っていた。

市立更生センター 宿泊午後五時から翌朝八時迄

雨

いぬは失せ

かげだけがうるついでる

くばられた施しが手のうちで

しだいに重くなっていき

とけだしたような

輪郭のない通り

をじつとみる

下校中の子供らが傘のしたで笑ってる

そこには余地があって

余白がある

あたりはもう暗くなる

わたしは隠れて酒を呑む

見つかればかれらによって  
追い放たれるだろう  
いまはただ  
呑み干して  
少しだけ覚る  
余地がなかったら  
裏返してまで  
書くだけと  
ながったらしい雨  
それがやめばまた寒さが増す  
手心のない仕方で  
あれはすべてを包むだろう  
遠くから  
かすかに火事の匂い  
それは果肉のあまさだ

お手を觸れないでください。万が一、破損された場合には

ひきはなされていくは町

あるいは夜

その果ての旅の、

放熱器むきだし、

いっぴきの軽トラックが

たたずまいの

兔唇のような少女ら

をまきぞえにした

おれはひとつの歩く窓だ

急げば宿る業の静まりには遠く

遅かったりは業よりのふるえはやまない

だろう

高架のたもと、

ふせるところもなく、  
あらゆるものひとがとまったなかでうごきまわってる  
すでに足はでくとなつて  
かつてなかつたもの  
いまもつてありもしないものたち  
を眼のまえにしやがった  
棘みせる熾き火ども  
すでにさきのないものなかにしても  
あの髪や衣や足はよく見えて  
それでもかおはおそろしい  
どんないい女であつても  
たなごこにしのばせてはその残り香をねじこめてた  
赤の点滅信号をふたり連れが過ぎる  
いずれの夜と日も質草にもならない  
なせないまんに落ちて流れ  
そこへおなじやつが訪れる  
空腹もばかもへんたいも  
宿なしも遠慮はいらないよ

寒かったら歩けばいい

高い窓たちが見おろしているなかだった

それを見つめるほかはなかった

朝霧の発ちはじめた、

高架のおわり

円を画く植えこみのふちでねむろうとする、

あなたのこわばりきった

その手を

行政の指導により、灰皿を撤去しましたので、

かぜによってきれぎれにされたものたちが坐る長椅子  
しきりのつけられた長椅子

大通りのどこかしらでかれらのすがたを過ぎる

かれらがよこたえるあいまにくじを買うひと

刷りあげられた偶然たちのまわり

賭けるものを見失ったものの、

沈黙

またしても戸口に鉢植えは立ったままで枯れ、

そこへいやらしくかざりたてるものはいる

ただ用済みなものでしかない

きいろい悲劇

おれだってそうしてきた

あまりにもおおきな流ればかりを見ている

あまりにもちいさなながれを見過ごしている

生田川の浅さは身を打つにはわるくない

詩はかならずや中断されるべきものだ

覗きこむのではない

ふれるためにそれはある

いったい、どれほどの狂気に対価を払ってきたのか

ふたたびかぜによってきれぎれになったものが

かれの御足をふるわせている

とじられたあきないを抜けては

ほんとうのことについて考えてみる

もう少しだけびっちりとしたみだらなものがみたい

両の手を夜のうちにさしこみ、おれはしたたかさをもってして

そこから花のようなものをひきぬく

いっぼん

またいっぼん

もういっぼんと、

これには終わりがなかったから

どっかの窓が叫ぶ

やめるんだ！

でないと通報する！

歩み去るのをじっくりと見せ

なるたけゆるりにしながら

歩をとめた

その窓は戸口にまで降りてきてはしばらくこっちを見てた

## 関係者以外の立ち入りを禁ず

いまだ霜月は温かいが

もの乞いたちはみずからのみえない戸口にむかって

その唇をつけようとしてる

もどるところのないかげたちの

ささやくこともない声をみてたら

どこかにきずぐちがあるような気はするも

それはうすみどりのまぼろしで

ここにあるのはただのくうらんさ

しくじりと負い目とにうめき

うごきだすときを探す

歩道のうえで

うごけないままの土鳩をみた

かれはてんでんと血を飾り

路上でおしまい  
の飛行をみせてた  
うごけないもの  
のための美と、  
愛するものが  
欲しい

広場のあたりで男  
たちが杯を鳴ら  
してた  
女たちはつかれ  
きって冷めた料  
理を抱えてる  
子供たちは眠ら  
ずにおわりなく  
まわりだす  
夜のほどろは  
すぐそこだ

見つめながら  
おもった  
神よ、

おれを楽しく  
憩わしめ給え  
よと  
でもおれはそ  
いつを呼ぶ小  
銭も持ち合  
わせてない  
だからとも  
かく、どっ  
かで眠りに  
就こう  
そのまえに  
おれは自身  
に火  
を吞ませ  
るべきだ

でもなぜ？

それはおそ  
らく、

あたら  
しい眠り  
へと目覚  
めさせる  
ため

## 世界人類が幸せでありますように

休日のある町、火刑に処されたぼくの真夏日が店頭の檻にゐた。買ったのは孤りの少年によってで、かれはそれを用い、蝶を捕えた。聞けばかれの出生は未定であるそうだ。しばらくのあいま、待ってみようとおもう。

あらたに借りた一室はそのやすさに身じろいだ。畳部屋の一角に男がひとりゐたのだから。かれには古縄が付属しており、周旋屋の談によれば、首をくくったまんま、死ねないそうである。たしかに息は荒く、梁のうえに苦しげだ。かれに色をほどこし、しばらくのあいだ、かれを時計と扱うことに決めた。かれの目玉は鳩時計のように、ある時刻になれば呻きとともに飛び出すことになっている。いずれ、同室につがいをくくる予定である。

耳のない男との会話は、調子のはずれた音楽だ。むろん声はとどいてる。けれどその顔にはいつも不安があるらしかった。そこでぼくは毎年、かれの誕生日に耳を贈っている。兎のやつ、猫のやつ、豚のやつ、パンのやつ。でもいまた人間のは手に入っていないから、まだかれの完成はいくばくかの死を待たねばならない。ファンがいてくれたらいいのね。残念だよ。――  
まえにもこの話し、きみにしたよね？

死体のない男が死んでいた。おもい戸口にこちらを伺っている。蒔絵のような、つよい色のシャツを来て、その真昼をな

がくする。おれは決してあけない。死人はみずからをみずからで持ち帰るべきだからだ。やがていつぴきの犬がかれに咬みついた。悲鳴を聴く。しかし痛みはない。ただその出来事に驚かされてる。あわれなものだ。タイプをうち、コニヤック風味のを吸い、またふたたびかれを聴いた。去るところも帰るところにも見放されたものには、さらに見放してやることだ。そのほかにしよはない。それにかれは死んでるんだ。死体なしで、心臓をならしながら。読むことは毒を呷ること、書くことは毒をつくること。

熾き火が見えますねと案内はいった。森の暗いところをふたりして歩いてたら、石にかこわれた火がそこへあらわれた。だれもない。おれたちは休むことにして火のまえに降りた。しばらく休んでいたら女がひとり現れた。なにも身につけてない。酔ってるふしもなく、うまめづのみことを思わせる。踊りつかれたのちのをだ。おれと白んぼは明けまで語り合った。女は最後に吐き棄てる——あいつ、あたしがだしてあげたのに、あつちは讚えられてこつちはいまだ端役だわ。いつになったら主役を張れるの？

馬たちもまた人間的だ。賭けごとを横から見ながら、かれらの滴りを聴く。賭け師どもはまた機械的だ。偶然に戸締りをさねながら札をきってる。べら一枚の千円札が財布のうちでかなしい。おれは賭けず、ただ呑んでた。五百円もする、出走表を握って。ここはh線のちかくで、駅とは地下の隧道でつながってる。おれは賭けず、ただ呑んでた。そこへ出生証と墓石のあいの子がちらにゆるりと近寄ってくる。かれもまた人間的だ。臭うほどの魂しいがある。おれはおもいだしてた。母の実家のちかくに厩舎があったのを。よく馬に触れようとしたっけ。かれはたぶんその馬の転生なのだろう。かれはいった、——少しでいい貸してくれ。おれは隠しからお守りにもってきたものをそいつにやった。セール品の、ふるい洋にんじん。

つまるところ夢は失せ

馬はくそをひりだす

胸のうちにある納屋がしつとりと燃え

いくどの午の原、

夜の原を燃えて、

いろどったとしても、

そののちに灰をも残りはず、

なにもも産まれはしない

だれもいなくなつた通りにはくそだけがのこされ、

ぼくはそれを踏む

ふさがれたものたち

それを見つめながら過ぎるとき

冷やされた青のむこうっかわに

悪態をつく女がいる

——なんでだれもあいつをふちのめさないの！

——あいつがどれだけひどいって知ってるでしょ？

ふちのめされる自身をおもい、

小説家へなろうかとおもう

だがそれはすでにありもしないことだった

つまるところときもひともし

燈しのある室はむしろひとでないものにこそふさわしい

病院、救貧院、避難所、刑務所、さまざまな檻にされた男たちのあいまをぬって、ぼくもどや街にきた。路上だつてありよ  
うによつては檻だ。それも際限のないしろもので、路地裏や自販機酒場、警察署のまえの水呑み場、三角の公園。借りてきた  
三十万をきりくずしながらおれはどやをまわつた。教会はだれもいれない。茶色い鉄扉がかれらを守り、テレビ画面が司祭の  
代わりをつかさどつていた。空気の薄い、または極度に濃い通りによつばらいが横たわり、真午の塵を浴みていた。

冬から春にかけてどやでなにもできずにいた。仕事の見つけられないまんま、飯場をぬけ、役所をぬけ、アルコール中毒専  
門病院へとたどり着く。またしても檻にされていた。これはまったくみずからの行為によつてだ。そこではほんとうの檻に入  
れられた。地下のしろい室に鉄格子はかたく、寝台は帆布でつくられ、便器は小さな穴だった。隣の老人が叫びつづける。看  
護婦さん！ここは看護婦のおらん病院か！——それから、ぼくは救貧院へ入れられた。

ごみはみずからおもちかえりを

自動車のいくつかと

おとこのひとりがさきをいく

けがらわしいなものかかなげられ

走る窓のあまたよりながれ落ち

たちどまった夜半のまわり

そのすべてのけがれのうちへ

かれは手をさして

かきあつめる

あなたはきちがいだな

なぜかって——きちがいだからだぜ

わかるかな、このジョークが

黙したままの眼

けがれに両の手をながされながら

上着のすきまいっぱいを埋めていく

うら若い秋だというのに

なんだ

この寒さは？

くず入れに入れよ。のうなしさん！

だれもあなたのやられたあたまを救えねえよ

あなたの死を祈ってる、鉄くず置き場だな

走っていく窓はあいかわらず

けがれを放ちつづけて

かれの上着がふさがっても

おわりそうになかった

感謝しなよ

なんでありがとうございますがいえねえんだよ

おれらだってひまじやねえからな

このあたりに植えこみは見えない

たまごにみせた灯りへとつぶやいてみる

なんだってわたしがあんなやつらに感謝するんだ

気づきもしないのだろう

だれよりもかれが美しいものについてわかっていることをだ

かれは死をもたずとも死んでいる

ねらいのないなかで失ったものたちが

過去のわれめをいつでも伝ってやってくる

金色のぬめりうなぎがそのうえをはいずって笑う

まったくの笑いをやめたお笑い種のくさむらのなか

まやかしの詩文学、うそ文字の物語、文法知らずの短歌、

かれを見ださない編輯者、訪れない吉報、ねむる路上へ消失した靴、

そしてひきつぶされていったなけなしの果実

すべてのとともすてきなゆうれいを求めて

抱けるだろう

ひとつきりの所有物

歩む

走るものたちの灯しに撃たれつつ

ふるい唄をくちにふくむ

前庭が見えた

車はなく

点しもないところに芝がからだをひらいて、

誘惑している、

そうおもえたから決まりだ

垣根のかげはそれだけで温かい

午前三時の窓はどれでも

かれのほうにおりていくことはなかった

かねてよりあつた浮浪の揺り椅子

眠りすぎてしまった

ひとびとによって抱えられながら

おれは病人だとおもった

おれは病人だとおもった

かれらのだれもそうはおもわないうちで腕

がからめられ、おどりを踊り

はばたくものをはなからもたない天神

を臭わせて回転灯へ乗車した

芝とけがれよ、ありがとう

窓のあやゆるものにつくしきが見えているのを識る

ひとの群れの、ガードレールの、無線をかざすおまわりの、その車の、

ひとたび光りに充たされた、どよものうつくしき

むごたらしいうつくしきにおもえる

ばかだな、あんた

このへんは重点巡回地区だよ、すぐに捕まえられる

きっと親だってあんたのことはお忘れになってるよ

かれはすべてのにおいを忘れはしないとおもった

光りが走る

そのようなしかたで

くるまはうごきだしている

日のありかの

かの女に語ってみよう

生活の文体はくだけちり

意味は逃げ

もはや希望は閉店まちかの値びきだ

おれには飛ぶ空もない

浮かべるまぼろしもうない

かれはそう告げてほほえむ

かれのほほえみに気づいたおまわりはその腿にそつとふれた

そのとき

このやろうだけは赦さない

かれは誓う

# take free

夜明けまえに

だれかが話してくれた

幼いころにいつびきの兔を殺めてしまったことを憶えてる

産まれたばかりのそれを追いかけているあいま

コンクリートのブロックを倒してしまい

天界へ送っちゃまったと

上級生たちが葬るなかで

ただ暴かれるのがこわかったから

からかわれっこのかれはただ黙ってた

そしておもいえがくことや

絵を描くことを救いにした

あるいは森のなかで山なすびやけむりきのこに触れることが好きで

友はなかった

好きになった娘にはいつも

ばれてしまってひどい目に遭わされつづけたものだ

やがてなにもやらないことを撰んだ

いろいろなところでものをうばわれ

あるいは棄て去り

そしてみずから壊滅したのだ

べつにこんなことで

斃れたりしない

ただ落ちることの美しさをおもうだけ

かれは死にかけてたもののように兎唇をふるわせ

あらゆるものを待ってる

駅まえの長椅子で

だれかがかれを訪ねるのを待ってる

## 蔵書検索はこちらの端末から

冬だった

三匹のノラねこと

鳩どもが

図書館まえで争ってるあいま

おおくのひとが

けむりを吐き

遠い建築の

おとを見てる

涅槃はきつと植えこみのうちにあるだろう

夜になればわかる

そいつが温かいときにはとくに

おおくのことが手のうち

はらわたのうち

着古した外套のうちでくずれさる

さしのべる手にはいつもくそをひりだしてしまう

ばかがただひとりでいられるだろう納屋が欲しい

またしても起こりもしないことを馳せ

伏所とかいうのを探しまわる

知らない男たちと

知らない女たち

それにしても、

夢のしりぬぐいにはどれほどかかるものか

なにかをつくりあげようとして

そのためにおおく砕き

おそれとうらみとふるえを育んだ

すべてみずからの撰びとった札

町へでてみれば星ですら質札はある

葉巻をすましてから

かの女のよこした手紙を読んでみた

ふるい同級生はこうかいてた

あなたにはもう書くことはできません

どうかかなにも書かないで

本を返却し終えて

おもてに戻る

ねこはどれも木のうえで

灯りにとまった鳩どもへ

ちかよろうとする

でもどうやってもとどきはしなかった

かれらはなにもいわず

順ぐりに木を降り

管理小屋のしたにもぐりこみ

それきり見えなくなった

歩きだすよりほか

はない

犬が雨を嗅いでた。父の郷里、ふるい製材所のそばにたつて幼年のわたしが叔父と話してる。小雨だったのか、傘はもたなかった。わたしは描いた絵の自慢をしつつ、若い、まだ学生のかれに遊んでもらってた。そしてできあがったブラモデルをふたつ貰ったものだ。後年、祖父の死に際してかれが腹違いなのを知った。わたしの父やほかの叔父よりも美しい妻を娶り、そろいの格好をした幼い少女をふたりもつけてた。マルドロールとツアラトウストラをかざりにたずさえて、かれとは一語もかわさず、ただかれの美しい妻をみてた。犬はもういなかった。雨もない。夏のさかりは棺に横たえたもの、その口をぱっくりとあけさせてた。

## USA American dream hair club

ひさしぶりだね

元気にしてたかな

そういえばこのまえ

みょうなことがあったんだ

もう暗くなったころだったかな

幼いかんじのおとこがね、よってきて

ぼくと眼をあわせてきたんだよ

「あの白いのが見えるでしょう」って

ところは駅から坂をいったところさ

どこに？ ってききかえす

「閉じたまんまの店先ですよ」

ああ、見えるよね、なんてうなづく

「そのてまえにも白いのがあったでしょ」

はじめにそっちをいったほうがいいのにね

「あの建てかかったビルの横できのう見ました」  
なにを見たっていうのかい？

「おかしいかもしれませぬ。男がふたり争っていたんです」  
それはよくあることじゃないのかい？

「そのふたりはいっぴきの猫でとりあっていたんです」  
「防音シートのしたからでてきた猫をです」

よっぼどの猫好きなんだね、そいつらは

「そいつはどうでしょうかね」  
どういう意味だ？

「その問いがわかりませぬ」

ともかくそのねこがいうにはやつは女に棄てられてきたらしい  
ふたりの男の臭いがしみついでいやだと。

かれらはいっぴきのねこをふたつにした  
そしてそれがさらに小さな子猫になつたらしい

猫語がわかるのか？

「いつもではないんです。かぜの角度や光りの吹きかたによりませぬ」  
かれはいう、なぜぼくにこんな話をさせたんですか？

つづきがききたいんだけど。いっぱい奢るからさ。

「やはりやめましようよ、こんな話し。あなたはなぜ？」

「なぜぼくにこんなことを話させるんですか？」

男は去っておれはふたたび坂をあがる

子猫の音がして

《動物学校、建設地》

そこに貴婦人が颯爽と

駐車場の軽トラックから降りて

赤いマントをひるがえした

防音シートのなかの、ねこに気づくや、

かの女はふたつにしていつぼうを持ち帰った

おなじようなことがいくらか起こるたびにねこはちいさくなり、

きのうにはもう見えなくなったんだ

信じなくてもいいよ

とりあえず、

下着をおろそうか

帽子やなんかはそのままでいいから

与えないうでくださら

敗れたものの味のする葎だ

敗れたものはいつだって醜い

閉じられた駅舎には燈しがあつて

いないものを照らしてる

横たわる階しのなかほどに坐つて少女

が紙巻きをやつてる

そしてつやのある頬をみせてる

犬がひき殺された角をゆっくりと歩いた

免許更新場から橋を見あげる

ここにはなにもない

それでも愉しんでた

まだ夜も温かいから心配はなかった

ぼくは帽子をさかさにおいて広場の長椅子になる  
小銭を撒いてだれぞめぐんでおくれよ、の合図  
そしたらいつか  
みずからの  
納屋をもてる

気がつくとき少女がぼくを踏んづけてる  
こうして2分の1時間を眠り  
もうじき胃袋の水を換えるころ  
ゆっくり頼むよとそれがいう  
ゆっくりやってくれ  
ゆっくり

## ここは小屋掛け禁止です

### ○墓場（昼）

音のない場所。

草木の多い、階段をのぼって入ってくる青年がひとりいる。

かれのそばをふいを突いて子供たちが5人走りぬけ、

階段をはずれ、傾斜のむこうにある繁みと林のなかへ、

蝻声とともに駆けていく。

そしてだれひとり見えなくなる。

ふたたび静かになったところで青年は歩を早め、階しを昇りきる。

### ○林のなか

ひとりの少年1がナイフを胸からだし、木に標しをつけている。

繁みに隠れて、その姿はほかからはみえない。

やがて刻みつけおわるが、その文字か暗号かは見えない。不明瞭である。少年がナイフを落としてしまう。

### ○墓場

青年はゆっくりと墓石の群れのなかを歩く。そこには感傷などはない。

### ○林のなか

少年2が枯れ木を刀のように構えている。対するのは1本の老木である。ふんばりをつけてその幹を打つ。反動で枯れ木が思わぬところへ飛ぶ。

### ○墓場

青年はひとつの墓のまえに立ちどまる。

### ○林のなか

少年3は花に小便をして笑ってる。そのまなざしが不意に虜れを帯びる。  
うしろから犬が飛びだして、あっさりとかれを喰い殺す。

○同じく

少年4は目潰しに砂入りの卵をもっている。それを駈しに地面に叩きつける。  
砂はかぜで舞い、かれの眼をつぶしてしまう。  
そのうしろから犬が来て、かれもくわれてしまう。

○墓場

青年はその墓を撫ぜ、頬をよせる。長い時間の経過。

○林のなか

少年1と2の屍を見おろしている少年5。ふるえながら隠しから拳銃をだす。  
敵を求めて藪を潜り、音を立てずに進む。

○墓場

青年が憐れむようにしゃがんでみると、うしろからいつびきの犬が現れる。かれはそいつを撫ぜ、触れる。犬の哀傷をとまなつたまなざし。かれは立ち上がって階しへ。降りていく足音。それがふいに失せ、倒れ、喜劇のように転げるかれ。かすかに流れる血。

○林のなか

藪にふせた少年は顔をあげ、狙いがまちがったことにきづく。おもてから聞えてくるのは静寂である。かれが立ち上がると犬がうしろにいる。かれはその犬とともに姿を消す。

○場末の町（夕）

ゆっくりと林と藪を抜け、都市の裏側へくる。灯のない裏窓によじのぼってテーブルのまえに坐る、ひとりといつびき。

やがて夜がきて灯しがつく。  
かれらはなにも語らない

数日が経ってもふたりはなにもいわない  
ある正后、犬は少年を噛みくだこうとし、  
少年は拳銃を放つ。  
ふたつは睦ぎごとの恋人同士をみせて死に絶える。

#### 墓場（昼）

音のない場所。  
草木の多い、階段をのぼって入ってくる青年がひとりいる。  
かれのそばをふいを突いて子供たちが五人走りぬけ、  
階段をはずれ、傾斜のむこうにある繁みと林のなかへ、  
蛮声とともに駈けていく。  
そしてだれひとり見えなくなる。  
ふたたび静かになったところで青年は歩を早め、階しを昇りきる。  
そのうしろをいっぴきの犬がついていくへ了

キャバレー・ロンドンへの入口はこちらではありません。当店は飲食店となっております、

なまくらだ

さみしいとか

むなしいとか

かなしいとか

おおきな通りをふたつまたいで、やかましい路次の、

そこのかげを嗅ごうとして腕をつかまれた

どこかぎこちない音声アナウンスとともに

どんな唄よりも冷えきった手はあつい

おれにはなんにもないんだ

それは有料遊戯の赤ランプだ

硬貨の切れてしまった屋上の遊具たち

なんにもいわないのは支那の慰安婦たち

とまっていってくれることへ

ありがとうだ

酒場の窓どもがうすぐらい光りをし、だれとだれとを蚕食してる  
帰っていけるのだ、

ありがたくおもいな

地下室から演奏が洩れだしてる

聞えて来ないはカーソン・マツカラーズのあの唄

おれは探してる、

うでつぶしのよいおんな

ひとりのおとこが足をすべらして転ぶ

ひざもとは孔をみせてる

みてみればじふんだ

女たちのわらい

血のながれにいぬがいろめく

おれにしか見えない犬だ

《おそらくこれがひとびとが恩寵というような言葉で語るものなのだ》  
ジェイムズ・サリスの主人公はそういった

夜更かしのひとびとに走る窓が叫ぶ

丘まで足をひろげて草叢をぬければ古い墓場だ

皺でできた男がこちらへ声をかけてきた

「若いのに、いいできだろう？」

「え？」

スコップと台車がうつすらとした

「こいつだよ。ほかになにがある？」

墓石がひとつ、人さし指をみせていた、——とても黒い

「おれは詩人なんだ。どういう意味か、わかるか？」

まるでわからなかった

「つまり、あらゆるものを葬るってことだよ」

主人たちのいない家、その車庫をねぐらにしていた頃がある。二十一のときだ。むきだしのセメントのうえにダンボールと布切れと寝袋をおき、本をならべ、ろうそくの灯りで本を読んだ。おもに椎名麟三を抱え、主要作品をあらかた読みおえ、全集に手をつけた。ほったらかしだった、ヘンリー・ミラーの北回帰線もそこで読み終えた。昼は親のいない実家で残飯を漁り、母の財布から小銭を抜いた。そうして五ヶ月がたった、あるとき、家の主人たちが帰ってきた。夫妻とその娘、その息子。ぼくは近隣の眼のなかで片づけをし、家にもどった。そして母方の祖父の伝で仏門をくぐり、ひと月でやめた。

しばらくお待ちください

とびらをあげ、

とびらのそとへでる、

そうしてとびらをゆるりととじる

むれのなかにとびこむ

だれもがうすみどりの

ゆうぐれどき

## 遺失物預かり所⇒

人生のために失う

失われるものたちを見よ

黒い馬

札のかかったなまぐさきものたち

どこへでもゆける窓

長いお別れのせりふ

れものように冷めた色彩

やなぎのようにしだれかかる美しいものども

玉葱のようにものがなしいものども

解体場の燈しのきらきら

残された小銭にみる自身

すべての友人になれない男たち

あらゆる恋人にはなれない女たち

夢は燃えながら建つ納屋

人生の、

人生のために失ったのだ

ラジオがとびきりひどいものを鳴らしながら

教えてくれることはおおい

ひとつにもはや、

口ずさめるうたのひとつもないということ

空間や時間の四隅で

おびえているものがいるということ

人生の、

人生のために失いつづけ、いっぴきの猫が馳せのぼる階段、

その半分に腰かけてみせよう

ほら、

なにがみえる？

## 鍵の複製・四十分

それは

十四才と半分

下級生の女の子から、

ごめんなさいといわれた

かの女がなにを謝ってるのかがわからない

聞き返していたら、

まわりのいやな連中が、

顔をにやにやさせはじめ

当惑したまんま

かの女のいたずらに

みえるほほえみ

うなづいては去るほかはなかった

いまだにぼくは当惑したまんまだ

かげははじめからすりかえられていた

おそらくここにあるものは、

あるものはおもいつかない

かげによってふきながされる少女たち

ばらばらになったスカートが土や葉にふれる

そのながれを窓が視てる

かの女はいつたい、

おれになにをしたのだろうか？

いたずらっぽいわえみ

あざわらうやつら

それもみな失せようとしてるのがわかった

つぎの行へとなだれこむ牝牛たちの姿

みな失われようとしてるのさ

あらたな道路工事と区画整理のため

巨きなクレーンがゆるりとしてるなか

いま夢のなか

にさえ

も

## 外国人登録・臨時運行

真午

うんと遠くからの手紙を

待ち望んでる

たとえば古看板のたもとでじつとかまえてる老いらくの猫や

裏窓から逃げだして日あたりを求めるひとりの若い女や

眠りを失くしてしまった狙撃者のひとりから

少年期からぬけだせないあわれなる青年から

遠くから来て

遠くに去る、

名も知らない外人から

まるで当てのない、

目的の隠れた手紙を

待つ

宛名のない書簡をばからしいことに朝は書いてる

あったこと

ありもしないこと

あろうとすること

あつてほしいことを書く

それらがすべて現実になろうとおもって

一篇の詩のためにする、

いちまいきりの襦ぎ

汚れのある寝台のはじっこに坐り

ひさびさにパンター・カフェを喫む

茶を流し込む

その湯気は生きてるようにこっちの鼻をくすぐり、

女のような仕方で窓のあちらがわへと

でていく

じゃあな！

こちらはいう

そちらこそ元気だと

あちらはいわなかった

## 閉じてから擦ってください

ゆるみはじめたうちがわ

やつれた笑みをそれは見せてる

あれがなぜ月と呼ばれなければならなかったのかを知らない

かの女ともしばらしてわかれたのはおそらく、

姦りつかれてたからだ

いまはべつの女が昇ってる

あれがなんで日と呼ばれるのかを知らない

からになった路上の長椅子を通勤者たちが過ぐ

ひとり、いやふたりが過ぐる

ぼくはアル中ども診療所へ

きみもご存知かもしれない

呑んだくれはだれであれ

みな長い緊張によって

眉のあたりや額がきびしい

そのおもぎしは赤か、白かで

そしてやせているか、ふとってる

かれらの顔にはなまえがない

大通りをはずれていって

中央競馬会の口に立ち

燃えたった小さな葉巻を投げて棄てる

火の粉は土<sup>アスファルト</sup>瀝青に

ちらばって

すぐに失せる

すぐに警備員がやっつけにかかった、とてもしずかに

もう1時間になる

愛し合おう

すべてよ

## お立ちにならないでください

ふるびた映像を見に入っ

かれは寝てしまったから

ケネス・アンガーがなにをやるうとしてたのかも知らない

色はおと

音はいろ

ねむりのなかだけはいつも温かい

おきていって青果店にいく

タイプライター入りのれもんを買って

室に帰る

そこでかれは叫んでみる

ああ、マヨネーズがくさりかけてる！

おお、便所のとびらはいつもあいたまんま！

もはや喪われることこそが悦ばしいと

かれはおもって

おれはおもわない

楽器入りの水瓜を買って

そこにあたらしいピツクアツプをつけよう

銀色のシングル・コイルがいい

それだけあればいい

八歳のみぎり、驚異は訪れた。担任はいかれるほど詩のことば、子供のことばの好きな男で、わたしを捕まえては詩的なものをひっぱりだそうとしてた。あるとき、終業まえの掃除で、わたしは怪獣モスラをちいさくしたような芋虫にでくわした。口から糸を吐きながら、息もたえだえに身をふるわす。もう長くはない。わたしがそいつをみせ、言葉にする、かれは慌ててそれを書きとめる、そして児童文芸誌に載せた。

冬のあるとき、体育の時間が来ていた。それというのにかれはわたしからある印象を引きだすためにあたまを悩ませていた。わたしが校庭でみずからを回転させ、眼をまわした。ただそれだけのことをつよい言葉に焼きなおさせようと必死になっていたのだ。なんていう大人なんだとおもったのを憶えている。不安をもって女の子たちがかれを呼びに来る。——せんせい、時間ですよ。

わたしは逃げ、そつと体操服のしたへ、シャツを着たままにした。かれはそれを見破ると笑いながら膝で、わたしを蹴りつづけた。それでも冬はおわらなかった。そのあとかれは転任して、消息はわからない。

## 乾燥したところにおいてください

少年期

学校の窓際、

それでもうすくらいところで坐ってた

その午后、みんなが作文を読まされてた

いつも口のうまいかれらもちよいとこまり気味

いつも気どってるいちめつこたちも

一人称にはぼくを使った

みんなにはそれがあたりまえで、

おかしくはなかったのに

いつも喋れないこっちははぢらいを憶え

わたしは、――

といいだしたそのとき

みんな笑いだした

長ったらしい笑いだった

腕をふりあげてみんなとおれを先生は叱りつけ

それははじめて識った、

虚構の側溝

幾年かが去って、

地獄をも闊歩してる猫たちがこのかおをひっかいたころ、

おれはもう

ぼくを畏れなくなってた

どこでもそれが使えるようになってた

作文の翌々日、

車庫の青いうしろっかわで

いっぼんのびわの木が伐りたおされてた

ぼくはそいつが好きだったのにおやじはなにも告げなかった

いっぼんの歴史を喪ったのである

それははじめて識った、

事実の果実

路上からでて二ヶ月

そんなにも経ってるのに

机のうえがあまりにさみしいので

らいおんを飼うことにしたのは、

あなたの助言による

覚えがないとすればそれはあなたがおれを知らないからだ

まだでくわしてないということ

もうじき伝令があるかもしれない

そのときにはあなたの小指をかれに喰わせてやってくれ

フラメンコ・ギター教えます (個人教授)

あけがた

かれは夢をみる

らばのそれだ

それがかれの流儀であって

おれのではない

ふるい唄のような、

室

戸棚から灰のふどうを頬ばって

たがいの夢に蚕喰されながら

午前の光りをみてる

かれの驟馬はいま

布引の大通りを走ってる  
車にひかれるようなことはまずない  
だってだれにも見えないのだから

ゆうがた

おれは夢をみる

野いちごのそれだ

これはおれの流儀であって

かれのではない

**not more not more more pipipi!**

夜の、

うすい空域のうちで

ねぐらを探し求めるのは

おろかさの証しだ

いっぽんきりの葺

その煙に身を運ばれて

しまいたい

土着の失われた自身だ

あるのは地理のみで

歩く足だけだ

長いあやまちのうちで

ひとを求めるのは

おろかさの終点だ

いっぽんきりの老木

それをたずさえて

きみに会えて

しまいたい

——正体のない、へたな落書きをおもわせるぼくが冬を歩いてる。



以上は、承っております——即興詩

3rd.07.2012

午

栈橋はもう見えなくなった

冬帽だけが歩いていく

そう、

あれがぼくですよ

まったく季節はずれの帽子ですね

いやな湿気だ

そう、

ひとそのものがあまりいませんから

驟雨っていうやつにやられて

なにもかもわからなくなる

七月はきらいですよ

あなたにはいつか

絵葉書を送りますね

手をふらずわかれ

われわれはそのままだ  
切りとられた空域のうち  
おれはマツチを擦る  
羽根を持たない、  
ひどく年取った男ら  
かれらが莨をねだりに来る  
正后だ

未定稿／未収録詩篇

ごみはみずからおもちかえりをおねがいます

自動車のいくつかと

おとこのひとりがさきをいく

けがらわしいなものかなげられ

走る窓の幾多よりながれ落ち

たちどまった夜半のまわり

そのすべてのけがれのうち

かれは手をさして

かきあつめる

あなたはきちがいだな

なぜかって——きちがいだからだぜ

わかるかな、このジョークが

黙したままの眼

けがれに両の手をながされながら  
上着のすきまいっばいを埋めていく  
うら若い秋だ

くず入れに入れよ。のうなしさん！  
だれもあなたのやられたあたまを救えねえよ  
あなたの死を祈ってる、じゃんくやーどでな

走っていく窓はあいかわらず  
けがれを放ちつづけしまい  
かれの上着がふさがってもおわりそうになかった

感謝しなよ

なんでありがとうごぎいますがいえねえんだよ  
おれらだってひまじゃねえからな

このあたりに植えこみは見えない  
たまごにみせた灯りへとつぶやいてみる

なんだってわたしがあんなやつらに感謝するんだ  
気づきもしないのだろう

だれよりもかれが美しいものについてわかっていることをだ  
かれは死をもたずとも死んでいる

ねらいのないなかで失ったものたちが  
過古のわれめをいつでも伝ってやってくる

金色のぬめりうなぎがそのうえをはいずって笑う  
まったくの笑いをやめたお笑い種のくさむらのなか

まやかしの詩文学、うそ文字の物語、文法知らずの短歌。  
見ださない編集者、訪れない吉報、ねむる路上へ消失した靴、

そしてひきつぶされていったなけなしの果実  
すべてのとでもすてきなゆうれいを求めて

抱けるだろう、ひとつきりの所有物  
歩む

走るものたちの灯しに撃たれつつ  
唄をくちに歩く

**Grapefruit moon one ster shining, shinen down on me**  
前庭が見えた

車はなく  
点しもないところに芝がからだをひらいて、

誘惑している、  
そうおもえたから決まりだ

垣根のかげはそれだけで温かい

午前三時の窓はどれでも

かれのほうにおりていくことはなかった

かねてよりあつた浮浪の揺り椅子

眠りすぎてしまった

ねむりのおわりには太陽と眼がある。走っているものはすでにいなかった。かれを発見したのはむかいに棲む老女で、かの女は週に二度、かれのねぐらの主をたずねては勧誘に向かう。当日もその予定だという。住人は不在だった。かの女もそれを知っていたが、あたらしく渡されたびらを投函すべく立ち寄ったという。そのとき、垣根のすみに黒いものが覗いていた。はじめかの女はおおきな黒猫とおもったらしい。隣家にもかの女が小動物をあやしているだろう声を聞かれている。しゃがんで、首を地面へかたむける。猫ではなかつたのだ。やがてちかくのおとこたちがきた。だれもがなにかを誇っているひとびとだ。おとに感じやすいかれは眼をつむったままに気づき、つむったなかで、どうなるかをおもった。

抱えられながら

おれは病人だとおもった

おれは病人だとおもった

かれらのだれもそうはおもわないうちで腕

がからめられ、おどりを踊り

はばたくものはなからもたない天神

を臭わして回転灯へ乗車した

芝とけがれよ、ありがとう

窓のあやゆるものにつくしさがみえているのを哲る

ひとの群れの、ガードレールの、無線をかざすおまわりの、その車の、

ひとたび光りに充たされた、どよもしのうつくしさ

むごたらしいうつくしきにおもえる

ばかだな、あんた

このへんは重点巡回地区だよ、すぐに捕まえられる

きつと親だってあんたのことはお忘れになってる

わたしはすべてののにおいを忘れはしない

光りが走る

そのようなしかた

でくるまはうごきだしている

日のありかの

かの女に語ってみる

生活は余命宣告書の文体で、意味はでていき、希望は閉店まじかの値びきだ

かれのほほえみに気づいたおまわりはその腿にふれた

そのとき

このやろうだけは赦さない

なにもみえない。テール・ランプも回転灯もなくなつて、ひとは立ち話しにもあいている。なるたけゆるりにおのおのの戸口へ走らせては、つぎの不審者を求める。この喧騒どよもしに乗じて、おれは廃屋の車入れをぬけた。そうしてごくごく小さな果樹園、そのわきにつらぬける藪道を踏む。枯れ枝に手の甲が切られた。かまうものではなかったが、おとを発てたくはない。しばらくして林にかわり、そこで左足を傷めた。くぼみにとられてしまい、足首をかるくねじる。そこからもぬけたのち、ふたたび宅地を過ぎた。鉄路にむかつて坂をさがり、あとは避難所にむかつて、やがておれも消えた。

## イエス・キリストはかならず甦る

くだかれたまんまのものが、またしても長椅子によこたえている。停留所からはいささかはなれているそこに、とにかくくちらばっていて、とつても愉快だ。顔も足もなにもが板のうえにあつて、休めているのか、絶えてしまつてゐるのかもわからない。暑さのなか、側溝も看板も電話ボックスも臭ってくる。それがもともと、なんであるのかもわからないものに両の目があつて、じつと視ている。なにを見ているのかはわからない。これでは生きることすらできない。

鳥のようなものが時折、どやの屋上から落ちてくる。死にはしない。ひとつきりの習慣としてもっている法則だ。救われるとしたら渴きを失くすしか、あるまい。だがその渴きがなんであるのかを尋ねる由はない。たとえば石をふれる、ひとびとがいる。自動販売機のまえでいつまでも立っているものもいれば、すべての髪を往来で剃つてしまふ老女もいる。そしてぼくも石に手を展ばす。こいつを感傷とも狂気ともいわせない。莩を啜えた男たちが、ぼくとひとりを見物していたつけ。

子供たちが裸のまんまで砂埃を走っていく。つづいて大人たちもだ。ぼくもいつてみることにして、ガードまえにある、いっとう大きな塵塚に来た。昼夜のべつなしに棄てられたものと、昼夜の別なしに漁るものとのいつも通り。なにがあるものかと、ひとのあたまを、そのすきまを探っていたら声。おれはもうごみだ！回収してくれ！

観衆の哄笑のうち、収集人どもの手はたやすかつた。ひとりが男を押さえつけ、もうひとりがガードむこうの交番から巡査野郎をふたり案内し、ひとのかたちをしているごみは、それもまたたやすく建物のうちかわへとなつた。ひとびとがそちらに

気取られているあいまに塵塚を覗く。するとどうだろう。まだ中身の残る、ジュースを見つけた。そして呑み屋とどやを抜け、大通りを駅にむかって左へ進み、石の長椅子に坐った。その根元には男が寝てる。ひとりぼっち、うつむけて。壇をひらいておいを嗅ぐ。悪くない。でもいいのとはちよいとちがう。白いてんが液体にはあつた。黴だろうか。まず一口やってみる。すっぱすぎるが、まちがいなく蜜柑の味。すっかり呑み終えてからあとくされもあつた。だからってどうなる。下腹をなぜながら、電信柱のびらを眺めていた。——キリストはかならず甦る！

甦るにはそのまえに死ななきゃならないよ、とおもつた。わざわざ便器にあたまを入れるようなもんだ。ぶつついて教会を見物した。ネオンの十字架、赤い屋根、白い壁、なかの見えない窓、ならんだ三台のモニターと放送される儀式、脅迫めいた文言、そして犬さえもよけていく、茶色い鉄扉が閉じられてる。だれも入れないんだ。そのとき、大きな音がして自動車が通過する。——悔い改めなさい！ いったい、なにを？ そしていつどこかれは復活するのか。おれは十五分も待ちぼうけを喰つた。もしもかれが戻ってきてこの地に立つとしたら、どこでその身を休めるだろう。避難所の列は長くつづき、公園には錠が降り、更生宿泊所はいっぱいだ。そしてここには鉄条網が司祭の代理らしい。——そんなことをおもつてわらつた。環状線の停車場にひとりの旅路が立つのを見る。聖なるかな、無賃乗車を試みて階しをあげた。くだかれた男が夏服と鞆にからだをゆだね、特急を待っている。ぼくも乗り込むとしよう。便所に隠れてしまえば、ちよるい。そこへ、だれかがやってきた。石のような娘。かの女がぼくにいう。

「どうか、わたしを撫でてください、——さもないと」——さもないと？

待合室での以下の行爲は禁じられています

おれの友人はいった、

おまえには社会生活はむりだと

おれはやつの恋人の室で寝げろした

のびてるおれをあとにしてふたりは一階で毛布をかふる

宿酔いの警笛が鈍ったおれのあたまに流れこむ

おれにはやはりひとりがいちばんだとおもう

いつもまいあがってはばかやる

ことに女の家だ

もう十年も前やつの家でもっとひどいのをやった

げろを吐き、小便を洩らした

いつもまいあがってへまをする

虚栄心によってあやつられる

もう会いにくるなといわれて、

都市間鉄道に運び込まれる

ひとびとのかげがおれを熱くするのだ

なぜうすみどりにすべてが映るのか

むかいの座席で女がひとりおれの顔を見てる

たしかにおかしななおだったかそれがほどでもない

それはゆっくりとおれにちかづいてくる

それはたしかにやってくる

それはこういったようにおもう、あなたには悪いものがついてる

そのとおりだよ、お嬢さん。——性悪女め。

列車が終点に着くまでにおれは何発撲られたのかを、

いまもっておもいだすことできない

## 落石注意

金のない夜ほどにいごちのわるいものはない

詩人どもの飾りことばなんぞ読んでられなくなる

かれらほどたちのわるいものはない

かれらの作品と称するおたわむれよりも

ぞつとさせてくれる

ありがとうはいわない

夢のなかでぼくは鱈の乳房をみた

それと平行して首のない犬をうつし世にみる

鏡の像がいつてる

おまえもくそ詩人のひとりだろって

かんべんしてくれよ、

やつらとおれはちがうんだ

洋式と和式くらいがちがいはぜったいある

批評なんてほかのやつがやればいい

おれにどぶさらいをやらすな

喰われるのがおちだ

長距離の軽ワゴンが労働者どもを連れ去っていく

ふたたびあれにのるのはたくさんだが

文学ごっこ遊びのくそ学生どもと

なぜいっしょにならなきゃならないんだ

おい、聞いているのか

おれの箴言をさ

夢のなかできみは白いからすの眼をみた

それと同じくして冷却器のはらわたをみる

いちばんにおぞましいのはとおれはいう

詩が詩だけで作家が作家だけかたまってることだね

仲間内でほめあったり、けなしあったりするんだらう

あほが服を着た連中さ、おれはただのきちがいだ

安心しておれの話しを聞いてくれ

なんでやつらは黙ることができないんだ

はじめっから口のうまいやつらなんてくたばれ

カール・ヨハン通りの夕べを歩きつづけてるみたいだね

みながみな、

こちらを見てる

くそ、おれは山師にもなれねえ

金のない夜ほどよいものはないと気づく

夢のなかでぼくはギターを啜えた蟹を見ていた

いっぽう現実のなかで喪われていた石を見ていた

一時預かり 1時間 ¥三〇〇

季節よ

宿を喪ったおれたちの臀はなによりもうつくしい

それほどまでにうつくしいものはないだろう

ビルヂングのあいまを泳ぐいっぴきのねこ

それを追いかけてたわむれる、

もういっぴきの季節よ

定型にも

不定形にも厭いて

みだれを抱く日と夜だ

喪うことこそがおれたちの誉れ

誉れ高い、

てんごくの古便所さ

通りや窓を敵に見たててあるくおれたち

すべてのものが喋らずに話し、

話さずにものをいって

あらかじめ武の装いを解き、

素裸にその敵どもや眼どもに触れようとしてる真午の戦い

立ちあがろうとする敗れものには棘こそが報酬

### 季節よ

二月はいまだ

青みがかった汽船がみずからの水平線を横切るとき

歌もおのずとみずからを唄い、

おれたちに畏れという凱歌をくれてやれる

この皮膚にジャックナイフを入れてやれ

くず入れのなかから

歩道のかげから

照らされる壁から跳ね返ってくる光り

閉じられたまふたのむこうでいま眠る光り

ひらかれたまなこのうちでいま醒める光り

それらをしかとみる、

おれたち自身が窓なのだ

入って来い、おまえ

二月はいま

季節よ、

矢印の反対側へ入っていくいつびきの車よ、  
おれたちもまたそのようにして、

勝ちえるものなかへ

入っていこうとする

いつびきたちだよ

こちらはおつとめ品です

気温はまた下降して

飛行機のような男

バンクーバーの冷たい夜

車の修理に追われ

婦人に逃げられた修理人

なにをも理解のできない女

さえない旅のさえない旅人

うごけなくなった山椒魚を見にいく見物人ども

くらい穴倉で生きつづけるいっぴきの鱧

ユーモアのレッスンにことをかかない教育者たち

踊りつづける、

母国語で笑う踊り子たちのスカートの間

たくしあげてよくみせてくれ

寅のようなまなこするいっぴきの猫

香辛料とホワイト・ルウ

七七円のトマト罐

つかいこなせない太鼓釘

でっかい送風機のオルガン

中古るのトルーマン・カポータイ

ふたたび飛行機のような男

イクタロードのばかたれども

客引きの吐くつばの耀き

ロツテンハイムの温い夜

おれはそれらを思いながら床にちらかったもの、

ちらばったもの、

こわれたもの、

くだかれたもの、

はきちらしたものを始末する

灰のようなひとびとのかお

思わずに撲りつけてしまいそうなパチンコ・パーラーの待ち人たち

くさりかけた緑とくさった黄とくさりきつた赤

くさってない青をたずさえておれがきみにむかう通り

教師や父母を好きなやつなんかない

おれを好きなやつがないようにな

またふたたび飛行機みたいな男

かれはなぜ飛び立とうとしないのか

銀のつばさをもだえながらひらめてる

お金のくそよ、おれの孔からこそでるべきだ

カルフォニア・ヴェニスのぬるい夜

冷蔵庫にはモノクロ・フィルムひと箱のみ

たえまないかなしみをたえまないざれごとにとりちがえよ

笑いながら三匹の妹といっぴきの姉がおれを無視して去る

好きだった女たちがつばをはいていく

かれもまた喜劇の一員だ

床もまたキャンバスだ

穢れの落ちないまんまにおれはアルコールを撒き散らす

しかしどれもが絵として完結してしまい、

これはどうみても弁済の対象

ジェフアーズとサーバーが読みたいから

これからはジェイムズ・ロビンソンと名乗ろうか

床の絵はもうじきできあがるだろう

だが気がつくとおれ棒切れにまきつけられ

三人の若人の道連れになつてた！

しかも真つ赤に染色されて白い縦じまがたれている

もうておくれなのだろうとおもいながらふとかれらの顔をみる

ふたたび飛行機みたいな男、かれは窓を失いつつある

ベルージャのなにもない夜

あなきすたとふたりで空気に孔をあける女

かの女自身が空気だというのに

それに気づこうとしない

うすらばか

おれは床をあきらめた

撃ち殺されたくない

でもやられたい

拳銃も美学

やっぱりまちがいはなかったんだ！



やめるわけにいかないのだ

三人の若人がさすらうもと

おれはふたたび旗になる

見てみるよ、

お若いやつらがやりあってるぜ

ポストモダンなんざけつでもくらえだ

路地裏でおれをののしる、ポワヴロットをねじこめてやったぜ

ざまあねえな、ぶす娘！

納屋もやがて燃えつきる

そのまえにおれはすきなことしかやらない

ふたたび飛行機みたいな男

砂丘に堕ちて

大口をあけてる

そのなかへしゆんべんをするのは果たしてきみかおまえか

ゆめゆめたかくくってはいけない

あまたるい葉巻を吸いながら

大男が現れる

そいつはおれの敵であつてもあなたのではない

カーゴ・カルトの飛行機に乗り込んで

おれはどこまでも逃げていく

バンクーバーの夜はやはり、

ペテルスブルグよりはやさしい

だがここは神戸だ

そしておれはまだ若い、——うら若い、——戒めのとき

機体の高度はあがりながらさがってく

## 責任は負いかねます

ある日発見したいちぶん――

《想像力は不在のうえに

過ぎ去った出来事のうえに養われる。》

ジェフリーの「写真の読み方」、

たしかそこにそう書かれてたっけ

だれもない室に燈しがともるとき、

終わったものごとのかすかなる残り香、

それらがひとであってひとでないものをぼくにおもわせる

もうじき階しをあがってそれはやってくるだろう

まるきり音も発せず

ぼくの室へと――

歓迎しようじゃないか

過ぎ去ったものが

現在と未来が変わるときを

ぼくのカメラは毀れたまま

露出のときを欲しがる

それではお先に失礼します。

硝子のうちのマネキンたち

おれはかの女らに情欲

を憶えるとき

がある

だというのもそこ

には悪意も

意地のわるさもなく

あふれものを癩扱いすること

もなければ

だれか

を糾弾すること

も意味もない

ままに

きずつけることもない

ましてやだれか

を橋のたもとへと追い放つことも

おそらくはないだろうから

ぼくはたっふりと眼

をやっては

過ぎ去る

だがいまでは

そんなやすっぽい光景

ですらすでに

どれも売り買いの対象

とされて

金のないもの

や、

ゆくあてのないもの

隠しをからっぽにしたものたち  
などがあたまにするものは  
おのれそのものだ

つまり

は金がないということと  
あてがないということのみ  
そのほかのことはなにも  
ゆるされていない

おれはふるえのなかで  
街路灯を掴んだ

つまるところ

夢は失せ

馬はくそをひりだす

胸のうちにある納屋が

しっとりした火をまとして

いくど夜の原を

いくど昼を

いろどったとしても

そののちに産まれ来るものはない

たれもいなくなった通りには

くそだけが残されて

おれはそれ

を踏む

幼いころだった

ぼくはいっぴきの兔

を殺めてしまったことがある

産まれたばかりのそれ

を追いかけているあいま

石の板を倒してしまい

天界へ送っちゃまった

上級生ども

がそれを

葬るなかでおれ

はただ暴かれるのがこわかった

からかわれっこのぼく

はただ黙っておもい

えがくことや

絵を描くことのみ

が救いだった

あるいは森のなか

で山なすびやけむりきのこ

に触れることが

好きで

友はない

好いた娘にはいつも

おもいをあばかれて

ひどいめに遭わされつづけたものだ

やがておれはなにもやらない

ことを撰んだ

いろいろなところでもの

をうばわれ

あるいは棄て去り

そして壊滅されたものだ

べつにこんなことで

おれのうちは斃れたりしない

ただ落ちる鳥の美しさをおもうだけ

まだ霜月は温かい

もの乞いたちはみずから

の戸口へ唇ちをつけようとする

どこかにきずぐちがあつたような気がするも

ここに見えるのはくうらんだ

負い目としくじりにうめき

うごきだすとき

を探して

歩道のうえ

でひとりの土鳩

が動けないでいるのが見えた

おれには愛するものが欲しい

広場のあたりをやる

と男たちが杯をかたむけている

そのそばを疲れきった女たち

子供たちがたちつくす

杯を手にした

やつらはそれらにはかまわない

で話しをつづけている

夜は明けようとする

そのときだった

女がねじれ

子供がまわりだした

それは永遠につづくようだ

見つめながら

おれはおもった

神よ、

願わくばおれ

を楽しく憩わしめたまえと

でもおれには神を手に入れる銭

のもちあわせがない

眠りにつくまえにいま

おれは火を吞むべきなのだ

当座金 10000円 (10000円)

12/25

入金 10000円  
出金 5000円  
残高 5000円

10月1日の売上

10月2日の売上

10月3日の売上

10月4日の売上

10月5日の売上

10月6日の売上

10月7日の売上

10月8日の売上

10月9日の売上

10月10日の売上

10月11日の売上

10月12日の売上

10月13日の売上

10月14日の売上

入金 10000円

出金 5000円

22

10月15日の売上

10月16日の売上

10月17日の売上

10月18日の売上

10月19日の売上

10月20日の売上

10月21日の売上

10月22日の売上

10月23日の売上

10月24日の売上

10月25日の売上

10月26日の売上

10月27日の売上

10月28日の売上

10月29日の売上

10月30日の売上

## 入力情報に誤りがあります。——付言するとすれば、

ここに収められた詩は'11年11月から、明けて'12年の2月ごろに書かれたものだ。当時は森忠明（詩人、童話作家、児童劇作家）に破門されているさなかで、じぶんの詩を自身で評し、撰ぶということに大変手間取っていた。最初に「さまよい（初稿）」を神戸元町にある、華僑の、老巨漢のやっている神経科のロビーで書き、そこから真夜中の町をさまよいながら、次々にその光景を詩に書き留めた。また1部は大阪での暮らしもモチーフに入れ、さらに当時の散文には灘区の更生センターについても書いている。27歳、カソリック教会の支援によって借りたホテルや、ようやくにして手に入れた物理的な居場所のなか、わたしはこれらの詩篇を編んだのだ。校正は澤あづさという群馬の詩人が手を貸してくれた。'12年の夏頃にモトコーのオガワ印刷で30部を刷り、手製本した。紙紐と木工ボンドで綴じ、シュリンクに包んだ。インターネットの詩書きたちが買っていった。翌々年、ふたたびオガワ印刷でマットの上質紙に4部刷り、近所の製本業者に綴じてもらった。かれらは印刷費を知って笑った。「足許見られたね」と。そして今回、この本をわが出版局から出し直すことにした。未収録と未定稿を加えて。内容はもちろん「38w」以前のものだ。サンプルを森先生へ送った。師は「遺失物預所」「USA」、「世界人類が幸せでありますように（その1部）」を気に入ってくださった。それで充分だ。

'17年6月

## 來歴Ⅱなかたみつほ

'84年生まれ。神戸市出身。土地を点々としながら、日雇い仕事などで生活する。19歳より詩人・童話作家Ⅱ森忠明に師事。28歳ではじめての詩集「終夜営業—Open 24 hours—発送受付」を手製本で刊行（本書のオリジナル版）。出版局「a missing person's press」を立ち上げ、詩集「38wの紙片」を刊行。そのほか絵画、写真、音楽作品を発表、販売。フリーマガジン「for MISSING/The magazine」を17年より発行。楽曲集「open all night / for missing person」、現在、短篇集「旅路は美しく旅人は善良だといふのに——そのほかの短篇」、詩画集「世界の果ての駅舎（仮題）」を編輯中。

# 終夜営業 | Open 24 hours | 発送受付

Copyright © 2012 by Mitzho Nakata

2017年7月3日 初版

2024年7月26日 改訂第4刷

著者 中田満帆

発行人 中田満帆

発行所 a missing person's press

〒651-0092

兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

[電話] 078-200-6874 [MAIL] mitzho84@gmail.com

ISBN978-4-9909502-2-4 C0092 ¥ 2000E

**Printed in japan**